

## 第52回 三重泌尿器科医会抄録

### The 52nd Mie Urological Meeting, Abstracts

日 時：平成24年7月7日（土）

場 所：ホテルグリーンパーク津「伊勢の間」

#### 1. Hybrid redical prostatectomy の経験

伊勢赤十字病院 泌尿器科

大西毅尚, 佐々木豪, 保科 彰

前立腺癌の根治的手術として現在、開放手術または腹腔鏡手術が一般的に行われているが、どちらの術式もそれぞれ長所、短所がある。そこで尖部処理までを腹腔鏡下で行い、それ以降は小切開を加え前立腺を摘出する方法を2011年12月から9例に施行した。手術時間の延長、合併症の増加は認めなかった。この術式は出血を抑えながら拡大視野での尖部処理が行えること、腹腔鏡手術の基本手技、腹腔鏡下前立腺全摘術習得のためのステップとしても有用であると思われた。

#### 2. 上部尿路上皮癌の診断における腎盂尿管鏡の有用性に関する検討

三重大学医学部附属病院 腎泌尿器外科

神田英輝, 有馬公伸, 西井正彦,  
舛井 覚, 西川晃平, 堀 靖英,  
吉尾裕子, 長谷川嘉弘, 山田泰司,  
杉村芳樹

目的；肉眼的血尿の精査および上部尿路上皮癌の診断のため当院で施行された腎盂尿管鏡の有用性を検討した。

対象および方法；主に細径軟性尿管鏡を使用した2007年7月から2012年6月までの42例、44尿管を対象にした。

結果；平均年齢は63.9歳、男性23例、女性19例、患側は右側26例、左側14例、両側が2例であった。尿細胞診異常、画像検査異常なし5例

(Group A), 尿細胞診正常、画像検査異常あり30例 (Group B), 細胞診正常、画像検査異常なし7例 (Group C) であった。Group A は2例 (40%), Group B は18例 (60%), Group C は0例に上部尿路上皮癌を認めた。Group B において病変部位別では腎盂腎杯13例中11例 (84.6%), 尿管17例中7例 (41.1%) に癌を認め、画像検査ではCTで腫瘍に造影効果を認めた18例中15例 (83.3%) に癌を認めた。結語；腎盂癌の診断は画像検査の正診率が高く、尿管癌の診断と比較すると腎盂尿管鏡の必要性は乏しいと思われた。

#### 3. 蛍光内視鏡を用いた膀胱癌の光力学的診断

三重大学医学部附属病院 腎泌尿器外科

山田泰司, 西井正彦, 舛井 覚,  
堀靖 英, 西川晃平, 長谷川嘉弘,  
神田英輝, 有馬公伸, 杉村芳樹

表在性膀胱癌はTUR-BT後、局所再発を高率に認める。その原因として、白色光では認識できない微小病変の残存が挙げられ、このような病変の確実な切除により再発率の低下が期待できる。5アミノレブリン酸 (5-ALA) はヘム合成経路におけるporphyrinの前駆物質で、細胞内でporphyrin IX (PPIX) に変換されるが、腫瘍細胞においてはPPIXが過剰に蓄積している。PPIXは紫外線領域で蛍光発色するため、紫外線領域を選択するカメラシステムにより、正確な腫瘍細胞の同定が可能となる。本技術を用いたTUR-BTにより局所再発率の低下を認める報告がなされている。われわれは高度医療である「5ALA溶解液の経口または経尿道的投与による蛍光内視鏡を用いた膀胱癌の光力学的診断」に協力機関として参加準備中である。

#### 4. 三重大学における Brachy therapy の現状

三重大学医学部附属病院 腎泌尿器外科

長谷川嘉弘, 神田英輝, 山田泰司,

有馬公伸, 杉村芳樹

三重大学医学部附属病院 放射線治療科

野本由人

松阪中央総合病院放射線治療科

山下恭司

三重大学でおこなった密封小線源療法について検討を行った。低リスクおよび中リスク前立腺癌と診断された 14 例を対象とした。処方線量は小線源単独例で 145 Gy, 外照射併用例では 110 Gy とし, 術中計画法, 辺縁穿刺変法で行った。平均年齢は 64 歳, 平均術前 PSA 値は 5.42 ng/ml, cT 1 c 症例が 7 例, cT 2 a 症例は 7 例であった。治療に伴う合併症の検討では, 外照射併用例 1 例で Grade 1 の直腸出血を認めたが, その他に合併症は認められなかった。IPSS, 尿流量測定検査においては治療 3 か月後に排尿状態の悪化が顕著であったが, 6 か月後には概ね改善する傾向が認められた。

これまでのところ, 全症例で再発は認めていない。